

令和2年度 北海道立生涯学習推進センター研修事業 課題対応型学習活性化セミナー（道北会場）事業報告

I 事業の概要

- 研修テーマ 地域づくりの担い手育成に向けた行政と住民の連携・協働
～ 地域住民の自己肯定感・自己有用感の高め方について ～
- 1 趣 旨 地域課題の解決に向けた住民の行動や学びを活性化するために、地域に合った学習スタイルの創出、連携・協働の促進について講演や演習を通して学ぶ。
- 2 主 催 北海道立生涯学習推進センター
上川管内社会教育主事会 北海道公民館協会上川支部
- 3 期 日 令和2年(2020年)8月21日(金)
- 4 会 場 本 会 場 南富良野町保健福祉センターみなくる
サテライト会場 名寄市民文化センター、羽幌町立中央公民館
宗谷教育局、オンライン
- 5 参加対象 市町村及び市町村教育委員会職員・各種審議会委員（社会教育委員、生涯学習審議会委員等）・社会教育関係団体職員・生涯学習関連施設職員・民間団体（NPO、企業等）関係者 等
- 6 参加状況 63名
(本会場23名、名寄会場17名、羽幌会場9名、稚内会場10名、サテライト4名)
- 7 日 程

12:00	13:00	13:15	14:45	15:00	16:00
受付	開会	講演	休憩	演習	閉会

8 活動の概要

(1) 講演「地域住民の自己肯定感・自己有用感の高め方について」

【講師】 環境教育プログラムファシリテーター 二杉寿志氏

【内容】 二杉氏から、様々な地域や施設、関わった人材など異なる環境で実施した事業実践を通して、自己肯定感や自己有用感を育む手立てについて説明があった。その中で、体験活動の重要性のほか、自己肯定感・自己有用感を育む「事業運営の手立て」の大事なポイント4点を紹介していただいた。

まず、「継続体験が大事」であること。体験活動を充実させる手立てとして、参加者に体験（DO）させ、運営者が参加者の楽しむ姿や成功、失敗した場面を見る（LOOK）だけで事業を完結させるのではなく、その後「なぜ成功や失敗したのか」（THINK）など事業の振り返りや分析する場面、「こうしたら成功する」など仮説化し試す（GROW）場面を取り入れることにより、次の体験（DO）の場

にこれまでの経験が活かすことができる「継続体験」が必要であるとしました。

2点目は、「継続体験をする指導者を育成する」こと。身近に事業が継続できる場所があり、年間通して指導者として活動できる環境を作ることにより、継続した様々な体験活動を通して指導者間の繋がりができ、その繋がりを活用して指導者を育成する仕組みが必要であるとしました。

3点目と4点目は「体験が人を育てる」「人が人を育てる」こと。特に、「自己有用感」を高めるためには、多くの体験の場を設けて成功体験を繰り返すことで「体験から学び成長する」機会と、「話をする」「認められる」など人が人を育てる環境作りが必要であると自身の経験をもとに参加者にポイントを伝えた。

講演の合間には、日頃事業で取り入れているアイスブレイクの一例を実演し緊張した雰囲気を和ませるなど、参加者がマチの事業で活かせる技術を持ち帰ることもできた講演になった。

(2) 演習「自己肯定感・自己有用感を育む事業運営の手立て」

【進行】	北海道立生涯学習推進センター社会教育主事	田尾和祐(本会場)
【運営】	上川教育局教育支援課社会教育指導班主査	小島紀行(本会場)
	社会教育主事	佐藤麻友美(名寄会場)
	留萌教育局教育支援課社会教育指導班主査	高橋枝里子(羽幌会場)
	宗谷教育局教育支援課社会教育指導班主査	渡辺準(稚内会場)
	北海道立生涯学習推進センター主査	久末考勇(オンライン)

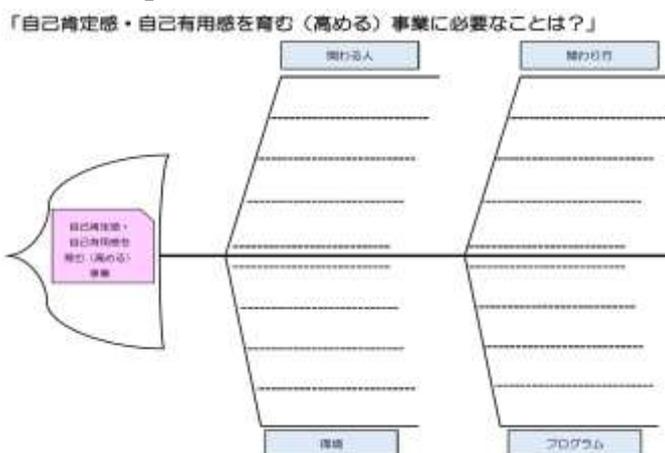
【内容】 講演に続き、本会場の進行のもと、本会場とサテライト3会場、オンライン1会場に分かれて実施した。

まず、「講演を聞いて、地域住民の自己肯定感・自己有用感を高めるヒントは？」をもとに、2人1組になって参加者同士で感想交流を行った。次に、オリエンテーションにおいてセンター職員が説明した「自己肯定感・自己有用感」の捉え方やニ杉氏の講演内容を参考に、シンキングツール「フィッシュボーン」を活用して、個人で「自己肯定感・自己有用感を育む事業運営の手立て」など事業運営に必要な要素を出した。その後、グループで各参加者のアイデアを情報共有し、新たな気づきや項目ごとでどの要素が最も重要であるか順位付けを行った。

グループで順位付けした要素を拡大したフィッシュボーンに示しながら、各会場の運営者が発表した。

今回の演習では、オンライン会議ツールを活用し、全体進行のもとで行う場面と会場ごとの進行で行う場面を設定するなど、遠隔地でも同様の学びができる新たな研修の形を提案することもできた。

【フィッシュボーン】





【本会場（南富良野会場）】



【サテライト会場（名寄会場）】



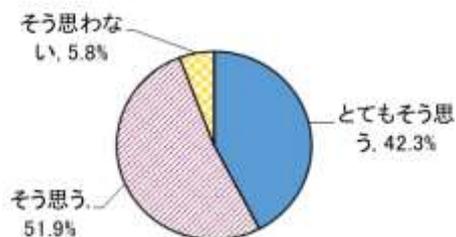
【サテライト会場（羽幌会場）】



【サテライト会場（稚内会場）】

Ⅱ 事業の満足度

- 1 本講座参加者数 63名
- 2 アンケート対象者数 52名
- 3 セミナー全体の感想や意見
 - (1) 「地域住民の自己肯定感・自己有用感の高め方」について考える機会となったか。



【参加者の声】

- 講師の経験を通して講義していただいたので、分かりやすく聞きやすかった。
- 事業を考える上であまり意識することがなかったのでよい機会になった。
- 難しいテーマでハードルが高いと感じていたが、演習で低くなったように感じた。
- 自然体験を主とした活動について、手法を学ぶことができたが、自己肯定感の部分をもっと学びたかった。

(2) 本セミナーの内容は、今後の事業改善や取組の検討へつながると思ったか。

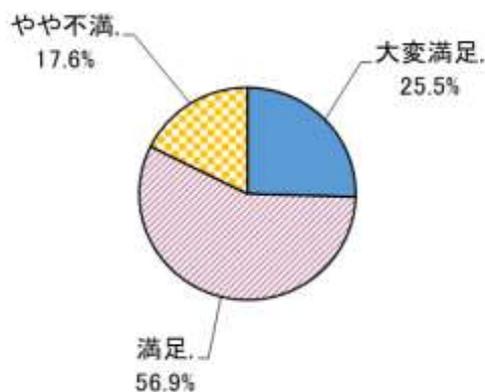


【参加者の声】

- 家庭教育セミナーの見直しを検討していたので参考としたい。
- 参加者が「できた、できなかった」で事業展開するのではなく、「どのようにしたらできるか」と方法を考える活動の大切さに気づき、自分の町の事業に活かしたい。
- 自分たちの取組に取り入れるイメージがわからなかった。

4 研修プログラムの内容についての満足度

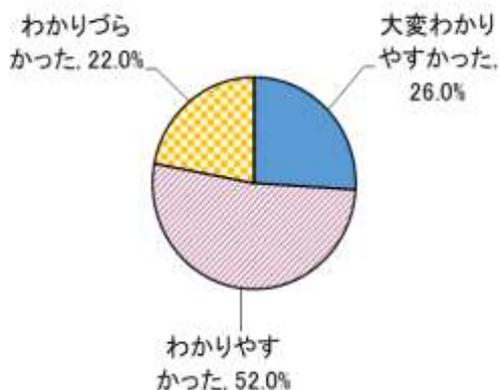
(1) プログラムの内容はどうだったか。



【参加者の声】

- 課題解決に向けて考えられるよう、グループワークを最後にできたのはよかった。
- 講演と演習でバランスよく学べた。
- コロナウイルス感染症拡大防止対策を取りつつ、演習もでき大変よいプログラムでした。
- 自己肯定感についてまだまだ学ばなければいけないと感じた。

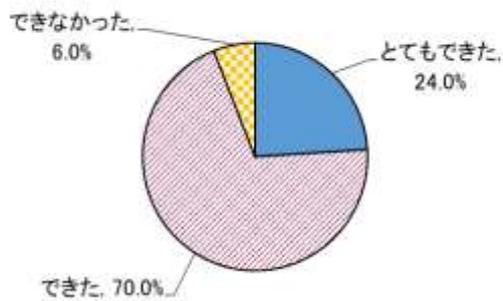
(2) 講師の説明はわかりやすかったか。



【参加者の声】

- いろいろな事例を出して説明されていたので、身近に感じる事ができた。
- オンラインでの参加だったので、キーワードなど紙で表示するなど視覚的に講義していただいたのでよかった。
- 講師がどんな活動をしてきたのかはわかったが、自己肯定感を高める方策など、より具体的な話を聴きたい。

- (3) 演習では、地域住民の自己肯定感・自己有用感を育む事業運営の手立てについて考えることができたか。



【参加者の声】

- 他市町村担当者の意見などが聞けて参考になった。
- 似た意見であっても、異なる観点から考えられるものがあって、さらに考えを深めることができた。
- もっと時間をかけて演習を行いたかった。

5 その他、感想や気づいた点について

- コロナ禍での開催だったのでサテライト方式になったが、今後このような形での研修が増えると思う。運営の参考になった。
- オンライン会議の可能性について考えさせられた。今回は道北会場だったが、オンライン会議ツールを使うと、全道規模の研修も行うことができる。
- 今後の道内～管内レベルの研修の指標となる体制で実施できたと感じた。
- (オンライン会議ツールを活用したため) 講演の時に音が大きすぎたり、聞きづらかったりした。
- 各会場のグループの意見をもう少し聞きたい。